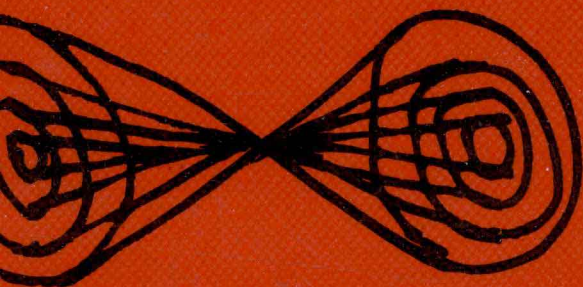


ブルースト

世界文學大系

52



プ ル ー ス ト

スワン家のほうへ ジョン・ラ
スキンの読書の日々 フローベ
ールの文体について 文体につ
いての覚え書 ボードレールに
ついて 書簡 献辞

淀野隆三・井上究一郎・鈴木道彦 訳

世界文學大系

筑摩書房版

世界文学大系 52

プルースト

昭和 35 年 2 月 29 日 発行

定価 450 円

者	淀井 野 隆 三
	鈴 上 究 一 郎
発行 者	古 木 道 彦
	田 晁
印刷 者	山 元 正 宜
発行 所	株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768 電話(291)局 7651

目次

スワン家のほうへ

淀野
上究一
三郎

第一部 コンプレ

第二部 スワンの恋

第三部 土地の名——名

250 124 5

評論他

鈴木道彦

ジョン・ラスキン

読書の日々

フローベールの「文体」について

文体についての覚え書

ボードレールについて

書簡

献辞

392 369 353 344 323 302 279

装
幀
庫
田
發

年 譜	解 説	ブルーストと四人の人物 の二重の「私」
	鈴井 木上 道一 彦郎	鈴木 タニシ 道彦 ヲイ エ
413	410	396

プ
ル
ー
ス
ト

スワン家のほうへ

ガストン・カルメット氏*

深くあつい感謝のしるしとして

マルセル・ブルースト

第一部 コンブレ

I

長いあいだ、私は宵寝よいねになれてきた。ときどき、蠟燭ろうそくを消すとすぐに眼まなこがふさがり、「眠るんだな」と思う余裕もないことがあった。それでいて、半時間もすると、もう眠らなくてはならない時間だとふと考えて、眼がさめる。まだ手にもつたつもりでいる本を下におこうとし、明りを吹き消そうとする。さつきまで読んでいた本の回想は、眠ったあいだにとぎれてしまっ

* (「ライガロ」の主筆(一八五二—一九一四)。ブルーストに紙面を提供し、彼を小説家と転向させた人。カイン夫人にビストルでうたれて死んだ。

たのではない、ただその回想は少し変な工合に曲ってしまったのだ、つまり、本に出てきた教会堂とか、四重奏とか、フランソワ一世とカルル五世との張り合いなどが、まるでわが身のこのように思われるのである。そうした気持は、眼がさめてからもしばらくは残るが、それは別に私の理性と衝突するわけではなく、ただ鱗うろこのように眼にかぶさって、蠟燭のすでに消えている事実を認めさせようとはしない。やがてそうした気持も、つかみどころのないものになり始める、あたかも輪廻りんね転生の後には、前世で考えたことがわからなくなるように。本の主題と私とは別々のものとなり、その主題に同化するもしないも、私の自由勝手ということになる。まもなく私は視力を回復する、そして自分の周囲がまっ暗なのでびっくりするが、その闇は私の眼には快く、安らかなのだ。いや、私の精神には、その闇は原因もない、わけのわからない、まったく朦朧もうろうとしたもののように映っているのだ、おそらくはもつと快く、もつと安らかなのだらう。いったい何時なんじだらう、と私は考えてみる。列車の汽笛が聞こえる、それは遠くまた近く、森の小鳥の歌のように、距離を教えながら、つぎの駅へと旅客の急いでゆく淋しい平野のひろがりを、私に描いてみせる。その旅人の迎ってゆくさざやかな道は、新しい土地、なれない行為、いままなお夜のしじまのなかを追っかけてくるよその家の明りのもとで交わしたさっきの雑談や別れの挨拶、間近に迫った帰宅の楽し

さなど、およそそうしたものからくる興奮のために、彼の思い出の奥深くに刻みつけられることだらう。

私は枕の美しい頬ほほ、まるくふくらんだ、初々はつはつしい、われわれの子供のころのほったたのようなその頬に、私の頬をそつとよせる。懐中時計を見ようとマツチを擦る。やがて真夜中だ。それはたとえばこういう時刻だ、病気を冒して立ち、見知らぬホテルで寝なければならなかったひとが、発作で眼をさまし、戸口の下にぼつと白んでいる光を見てほつとする時刻。ありがたい、もう朝だ！ すぐ召使はおこされるだらう、ベルも押せる、助けにもきてくれる。業わざになれると思うと、苦しみに堪える勇気がわく。折も折足音が聞こえたようだ。足音は近づき、やがて遠ざかる。戸口の下に光がふつと消えた。真夜中なのだ。いまガス燈を消したのだ。残っていた最後の召使は行ってしまった、そしてそのまま、ほどこす術もなく、夜どおし苦しまなくてはならない。

私はふたたび眠ってしまった、もうそれから、ときどき眼がさめることがあっても、ほんの短いあいだだけで、羽目板の干割れの音を聞いた、眼をあけて闇の万華鏡まんわきやうを見つめたり、すべてのものの陥っている眠りを、意識にさす瞬間的な光で味わったりするような、ごくわずかなあいだにすぎず、家具だとか部屋だとか、その他いろんなもの、私もまたその一部分なのであるが、そうしたすべてのものの陥っている眠り

の無感覚に、すぐに融けこんでしまう。そうかと思つくと、眠っているあいだに、二度とふたたびめぐつてこない幼年時代のある時期にやすやすとはいりこんでいて、そのころのたわいもない恐怖、大叔父に巻毛をひっぱられたときのような恐怖をふたたび覚えた。そうした恐怖は、巻毛を切った日——それこそ私にとつて新しい時代が始まった日だが——その日以来消え去ってしまったものなのだ。ところが、眠っているあいだは、髪を切つたそんな日のことは忘れてはてている。そして大叔父の手から逃れようとしてやつとやまく眼をさました瞬間に、その日のことが思い出されたのだ。しかしそれでもまだ大事をとつて、すつかり枕で頭をつつんでから、ふたたび夢の世界へはいってゆくのだつた。

時によると、イヴがアダムの肋骨から生まれたように、ひとりの女が、眠っているあいだに筋違いをおこした私の腿から生まれることがある。その女はまさに私の味わおうとしていた楽しみからつくり出されたものなのに、私はその女が楽しみをつくつてくれるように思う。私からだは彼女のからだのなかに自分の体温を感じて、それと合体しようとする、そして眼がさめる。私がつたいま離れたこの女にくらべると、ほかの人間はずいぶん遠々しい気がする。頬はまだ彼女のくちづけにほてり、からだは彼女の身の重みでぐったりしている。よくあるように、それがこれまでに知り合いになつた女の顔立をしているときには、私はもう一度見たい

の一念に凝りかたまろうとする、ちよつど宿望の都市をわが眼で見ようとして旅立つひとたちや、夢想の美を現実の世界で味わうことができると思っているひとたちのように。だんだんその女の思い出は消え去り、私はいつしか私の夢の女のこととは忘れてしまう。

眠っている人間は、時間の糸を、歳月や万象の秩序を、自分のまわりに輪のように巻きつけているものだ。眼をさますと、本能的に、そうしたものをまさぐつて、そこから自分の占めている地点と、眼がさめるまでに流れ去つた時間とを、瞬時に読みとるのだが、往々そうしたものの系列はもつれたり、切れたりしがちである。不眠の夜の明け方近く、本など読んでいて、いつもの眠る姿勢とはまるで違つた姿勢でいるところを、睡魔に襲われるといつたときには、ただ腕の位置が上がつたというだけで、太陽の歩みをとどめたり引きさがらせたりすることは容易なので、眼のさめた最初の瞬間にはもう起きる時間だとはわからないで、たつたいま床にいたばかりだと思ふこともある。さらにもつと工合のわるい違つた位置、たとえば夕食後、肘掛椅子にもたれてまどろむむといったときならば、脱線の世界におちいって混乱はきわまり、魔法の椅子にのつて、時間と空間のなかを全速力で駆けめぐり、さて臉をあげてみると、なんだか他国で数か月もまえに寝たような気にもなるだろう。だが、私の場合は、ただ自分の寝台に寝て、そのうへ睡眠が深くなり、完全に精神

の緊張がゆるむむだけで十分だつた。それだけで、もう私の精神は、眠つた場所の見当を失つている。そして真夜中に眼がさめると、自分がどこにいるのかわからないために、最初の瞬間は、自分が誰なのやら、そんなことさえはつきりしないことがある。私は動物の心の底にうごめいているような、きわめて単純な原始的生存感をもっているだけだ。私の思想は穴居人のそれよりもさらに貧困である、しかし、そんなとき追憶が——いま私のいる場所の追憶ではなく、かつて住んだことのある場所、またはどうも行ったらしい二、三の場所の追憶が——上天の救いのように降つてきて、単独では抜け出すことのできない虚無から、この私を引き出してくれるのだ。私は一瞬のうちに文明の幾世紀を超える。そして、まず石油ランプ、ついで折襟シャツ、そういつたもののぼんやりと眼にうつる像によつて、少しずつ私の自我の本来の姿は回復されるのである。

われわれの周囲にある事物の不動性は、おそらく、そうした事物が他の何物でもなく、その物自身であるというわれわれの確信、つまりそうした物に対するわれわれの思考の不動性に由来するのである。とにかく、そんなふうにして眼がさめるとき、私の精神は、私がかんじることを知ろうとしてやつきになるのだが、それはなかなか成功しないので、すべての物が、土地が、歳月が、闇のなか、私のまわりで、ぐるぐる舞いをするのである。ひどく寝くたびれて動

くこともできない私のからだは、その疲労の呈する型にしたがって、肢体の位置の目星をつけ、それから壁の方向や家具のありかを推定し、からだの横たわっている部屋をふたたび組み立て、決定するのである。肉体の記憶、肋骨や膝や唇などに残っている記憶が、かつて肉体の眠ったいくつかの部屋をつぎつぎに描いてみせる。そしてそのあいだ、肉体のまわりには、眼に見えない壁が、想像された部屋の形に應じて場所を変えながら、暗黒のなかで旋回する。そして私の思考が、時代や形の吟味に一步踏みこもうとしてためらいながら、ようやく四冊の事情に照らし合わせて、同じ住居だと見きわめるそのまえに、一方、私の肉体のほうは、それぞれの部屋について、寝台の種類とか、戸口の位置とか、窓の明りの取り方とか、廊下のあり方とかを、私とその部屋で寝入るときや眼ざめぎわにめぐらした思考とともに思い出している。こわばった私の脇腹は、自身の向きを推察しようとして、たとえば、天蓋つきの大寝台で顔を壁のほうに向けて横になっているといった想像をはたらかす。と、すぐに私は、「おや、お母さんがおやすみを言いにこなかったのに眠っちゃったんだな」と心という、そんな私は、田舎の、何年もまえに亡くなった祖父の家にいるのだ。私の肉体、下にして寝た脇腹は、私の精神のけっして忘れはしない過去、そうしたある過去を忠実にかくまっています、天井から鎮でつるさされている骨壺型のポヘミアン・グラスの有明ランプの煌

とか、シエナ大理石の暖炉とかを思い出させるのであって、それはコンプレの私の寝室、祖母の家での、遠い昔の日々なのだが、正確に思い浮かべられなくて、私にはなんだか現在のことのように想像される、だが、やがてすっかり眼がさめたら、もつとはっきりわかつてくるだろう。つぎにはまた、別の姿勢の追憶が現われる。壁は違った方向にすべり去り、私はやはり田舎の、サン・ルー夫人の別邸の、私にあってがわれた部屋にいる。しまった！もう十時にはなっているだろう、晚餐はすんだに違いない！毎晩、サン・ルー夫人と一緒に散歩して帰ると、晚餐の服を着るまえに、軽い眠りをとるのだが、どうも寝すこしてしまつたらしい。というのは、コンプレ以来、ずいぶん年がたっているのだ。コンプレでは、散歩の帰りがいくら遅くなつても、まだ部屋の窓ガラスに夕陽があかあかと映えているのを眺めたものだった。タンソンヴィルのサン・ルー夫人の家での生活は、そんな昔とは違った生活で、したがって、私の見出す楽しみもまた違い、夜になって初めて外出し、かつて幼いころ、陽の光を浴びて遊んだ同じあたりの道を、こんどは月光を浴びてたどるのだ。そしてその帰途、夜のなかにぼつり一つともっている燈台、ランプの明りもれている自分の部屋を、遠くからみとめるのだ。やがてその部屋で、晚餐の着がえもせず、私はうたた寝をするのである。

これらの濃くとして渦巻く喚起は、けっして数秒とはつづかない。しばしば、私のいる場所の喚起のそうした短い不確実さは、その不確実さのさまざまな原因を個々に推定する判別力を与えない。われわれが馬の駆けるのを見ながら、映写機の示すような姿態のつぎつぎの連続を、実際に切り離して見分けることができないのと同じである。だがこうして私は、これまでに住んだ部屋を、一つまた一つと思ひ浮かべて、ついに眼ざめにつづく長い夢想の時間、そうしたすべての部屋を思い出すようになっていた。冬の部屋、それはじつに雑多なものでこしらえた巢だ。しかも、どこまでも鳥の技術にならつて、枕の隅、夜具の襟、肩掛の端、寝台の縁、《デバ・ローズ》の一部をまで一緒くたに塗り固めてしま、そうしたもののなかに首をちぢめて寝る、そんな部屋なのだ。酷寒に（あたかも孔の奥の地熱のぬくみのなかに巢を営む海燕のように）外界から隔てられていることをしみじみ感じて、それが楽しい喜びとなる部屋、または夜とおし暖炉の火をおとさないで、ときどきもえる熾火のちらちら光るけむった暖かい空気、そんな空気の大きな外套にくるまって眠る、そしてその外套は、いわば、無形のアルコーヴ、部屋そのもののまんなかにうがれた暖かい洞穴、またたとえば、隅の、窓辺に近く、暖炉からは遠くて、外気のために冷やされたあたりから、顔をひいやり撫でにくる風がよく通る、したがってまわりの温度の絶えず浮動する放熱帯

ともいえる部屋、それが冬の部屋である。——夏の部屋、それは生温かい夜気と一つになるのを楽しむ部屋、月光が細目にあけた罫戸を手がかりに、寝台の脚もとまでその魔法の梯子を投げる部屋、光の尖端で微風に揺られる山雀のように、ほとんど野外の吹きさらしで眠る風情の部屋だ。——時には、ルイ十六世式の、初めて泊った晩でさえ、さしてつらくはなかったほど晴れやかな部屋。細い円柱が軽く天井を支え、それがひどく優雅に間隔をとりながら寝台のありかを示し、寝台に十分のゆとりをつけている部屋。——時には反対に、部屋の小さいわりに天井がひどく高く、二階建にもなるほどの深いピラミッド型で、そのところどころにマホガニーが張ってあって、もう最初の瞬間から、喚ぎなれないヴェチヴェールの匂いに気分を悪くし、紫色のカーテンの敵意と、傍若無人に大声でわめき立てる振り時計の傲慢な無頓着さに、すっかり圧倒されてしまった部屋。しかもそこには角脚の異様な冷酷な鏡が、部屋の一角をななめに仕切って、私の平素の視野の快いふくらみにざっくり切り込み、そこに思いもかけぬ敵地を作っている、そしてそんな部屋で、私が眼を上げ、不安な聞き耳を立て、鼻孔をひろげ、心臓をどきどきさせながら、寝床に横になっているあいだ、私の思いは、正確に部屋そっくりの恰好になり、その巨大な漏斗状の天井のてっぺんまでもふさごうとして、何時間も、拡散したり

* 虫除けに用いる草根。

のび上がったりしながら、幾夜も幾夜も寝られないで苦しみつづけたあげく、ついに習慣がカーテンの色を変え、振り時計を沈黙させ、そっぽを向いた無慈悲な鏡に憐憫の情を教え、ヴェチヴェールの匂いをすっかり追い払わないまでもさして鼻につかないようにし、天井の目立った高さを著しく減少するのだった。習慣！この巧みな、しかしずいぶん気長な支配人は、まず、われわれの精神を何週間も仮小屋に閉じこめることから始める、しかし、何はともあれ、習慣を見出すことは、精神にとつてまことに仕合せだ、なぜなら、習慣というものがなく、ただ精神だけの手段しかないとしたら、あてがわれた部屋を住めるまでにするのは、われわれにはとてもできないことだから。

なるほど、私はもうはつきり眼をさましていた。からだ最後の寝返りをうち、確実をつかさどる神の使が、私のまわりのすべてを不動の位置にすえて、私を私の寝室の夜具に寝かせ、手箒、机、暖炉、表通りに面した窓、二つの戸口、そういうったものを闇のなかで、およそそれそれぞれあるべき場所においてしまったのだ。しかし、眼ざめ際の朦朧状態で、一瞬のあいだ、その影像がはつきり描かれないまでも少なくとも眼にだけは見えていると信じられたあのさまざまな住居、そういう住居から自分が抜けきっていることはわかって、もうどうすることもできはしない。もはや記憶に機勢がついたのだ。たいていの場合、私はいきなり眠り入ろうとは

しない。過ぎ去った昔の一家の生活、コンブレの大叔母のもとや、バルベックや、パリや、ドンニールや、ヴェネチアや、その他における生活を思い出したり、さまざまな土地、そこで近づきになったひとたち、そのひとたちについて見たり聞いたりしたことを思い出して、夜の大部分をすこすのである。

コンブレでは、母や祖母から離れて眠らずにじっとしていなければならぬ寝室のことが、毎日のように、日暮れから寝にゆく時間までの長いあいだ、私の不安の悩ましい中心になるのだった。そうした夕方のもあまりにもみじめな様子を見かねた家のひとたちは、私の気をまぎらすために、幻燈を映すといううまいことを考え出して、夕食の時間を待つあいだ、それを私のランプに仕掛けてくれた。するとその幻燈は、ゴチック時代の一流の棟梁や、焼絵ガラスの巨匠にならって、不透明な壁を、微塵の虹彩と色さまざまな超自然の幻にかえてしまい、あたかもちらちら揺れて瞬時にうつろう焼絵ガラスでも見ているように、そこにいろんな伝説が描き出された。だが私の悲しみはますますばかりだった、なぜなら、そんな照明の変化だけで、私の部屋の習慣はこわされたから。寝るという苦しみを除けば、この習慣のおかげで、私はもう部屋のことを気にしなくなっていたからである。それなのに、いまはもう私の部屋とも思われず、まるで汽車を降りて初めて着いたホテルか「山

「庄」かの部屋にいるように、自分の部屋で私は不安になるのだった。

馬を急がせ、胸に一物あるゴロが、丘の斜面を暗緑色のびろうど地に染めなした三角形の小さな森から現われ出で、躍り上がりながら、あわれなジュヌヴィエーヴ・ド・ブラバンド・ブラバンの城のほうへ進んでいるが、その城は一つの曲線で断ち切られていて、その曲線といふのは、ほかでもない、幻燈の溝にすべりこませる様にとりつけた、楕円形のガラスの原板の縁なのである。つまり城の一翼だけが見えているので、その前には野原があり、そこに青いベルトをしたジュヌヴィエーヴが物思いに沈んでいる。城と野原とは黄色なのだが、それは見るまでもなく何色だか私にはわかっていて、というのには、原板を枠にとりつけるまえから、ブラバンという名の金茶色のひびきがかはつきり私にその色を教えたから。ゴロは一瞬立ちどまって、大叔母が声高に読みあげる長い口上をふさぎこんで聞き、すっかりのみこみ顔になる。ある種の威厳を失わない素直さで、台本の示すとおりに身をこなしながら、ついで彼は初めと同じように馬を駆って遠ざかる。そして何ものもその悠々たる騎行をとめるわけにはいかない。幻燈を動かすと、ゴロの馬はカーテンの上を、その襪のところでふくれ上がった、またその窪みに駆け下りたりしながら、どんどん歩みつつけるのである。

* 中世の黄金伝説のヒロイン。前出のゴロは彼女の夫君の執事。

ゴロ自身のからだも、乗っている馬のからだと同じような超自然的な性質をおびていて、途中に横たわるあらゆる物的障害、あらゆる邪魔物を、片っぴらから平らげ、それを自分の骨や内臓にしてしまし、たとえそれがドアの把手であるうと、ただちにそれに乗り移って、彼の赤い服や蒼白の顔をくつきり浮かび上がらせるのだが、いつも同じように高貴な、同じように憂鬱なその顔は、そうした骨格の整形にも、少しも苦痛の色を見せなかった。

そんな幻燈、メロヴィンガ王朝の過去から出てくると思われた幻燈、そして私のまわりにあるのに古い歴史の影をさまざまさせた光面を、私はなるほど美しいとは思った。だが、すっかり自我で満たしきり、自分自身に対すると同じようにあまり注意を払わなくなっている部屋のなかへ、こうして神秘と美が侵入してくることは、やはり言いようもなくいやな気持だった。感覚を鈍麻させる習慣の力が停止してしまうと、私は物事を要に仕めつぽく考えたり感じたりし始める。この部屋の把手にしても、回さなくてもひとりですつとあくように思われるという点で、私にとっては普通のほかのどんな把手とも違っていて、つまりそれはどこまでに取り扱いが無意識的になっていったの、もうそれがいまはゴロの霊体のように思われるのだ。それで私は夕食の合図が鳴ると、ゴロのことも「青鬚」のことも一向に知らない大きな吊りランプが、家

* 神霊学の用語。

のひとたちやynchurd・ピールにはなじみ顔で、夜ごとの光を投げている食堂へ、急いで駆けこみ、ジュヌヴィエーヴ・ド・ブラバンの不幸でいっそうなつかしくなったお母さんの腕のなかに飛びこんだ。しかしそうはしたがらも、ゴロの罪悪は、なおもくよくよと私自身の良心を反省させるのであった。

夕食がすむと、悲しいことに、まもなく私はお母さんのそばを離れなくてはならなかったが、お母さんはいえ、あとに残って、天気の良いときは庭で、悪いときはみんなのさがる控えの間で、ほかのひとたちと話し合う。みんなもいっても祖母は別で、「何でことでしょうか、田舎にいて閉じこもっているなんて」と思っている祖母は、雨のひどい日など、いつまでも父と議論をたたかわしたものだ。そういう日には、父は私を外へは出さずに、部屋へ本を読みに来るからである。「そんなことじゃだめですよ、丈夫な強い子にするには」と祖母は嘆かわしそうにいう、「とりわけこの子には、うんと体力と気力とをつけさせる必要があるんですからね。」すると父は肩をそびやかして、晴雨計を見る。父は氣象学に凝っているのだ。母はかわらで、そうした父の邪魔にならないように気をくばりながら、息を殺し、敬意をこめてうつとりと眺めるのだが、そうかといって強く見つめるのではなく、父の立派な心の奥深くに立ち入ることをひかえるといったふうである。ところで、祖母はというと、どんなお天気でも、た

と土砂降りのときでも、フランソワーズがぬらしては一大事と大切な柳の脇掛椅子を、大急ぎで内に入れるようなときでも、驟雨にたたかれてはいる人気がない庭に出て、白髪まじりの乱れ髪をかきあげながら、健康にいいという雨や風に、もつとよく額をうるおそうとするのである。「これでやっと思がつけます！」と祖母はいう、そしてずぶぬれの小道をあちこちと歩きまわる——その道筋は、自然に対する感情というものを全然もっていない新米の庭師が、自分の一存で、やたらと対称的につけたもので、父は朝から、この庭師に、天気はもちなおすだろうかとたずねていたのだが——そうした小道を祖母は調子にのってちょこちょこ走り歩きまわるのであって、その足取りは、あんず色のスカートにはねを上げまいとするしらずしらずの気持に合わせたというよりも、むしろ嵐への陶醉、衛生の力、私に対する教育法の愚かさ、庭の対称的なつくりなどといったものが、彼女の心のなかにひきおこすさまざまな感動に合わせたものであり、結局スカートは、上のほうまではねだらけになってしまふので、それがいつも祖母の小問使の泣言と頭痛の種になった。

夕食後、そんなふうな庭を歩きまわる祖母を、家にひきもどすものが一つあった。それは、そのぐるぐるまわりの散歩中、蛾のように、周期的に、控えの間の明りの正面に祖母が現われるときで、たまたま、控えの間のカルタ・テーブルの上にリキニールが出ていて、大叔母が、

「パチルド！ とめにいらっしやい、旦那さまがコニヤックを召し上がりますよ！」と叫ぶ、そんなときである。大叔母は、じつは、祖母をからかうために（祖母は父の家庭にあって、一風変わった気質を曲げなかったもので、みんなからなぶりものにされてきた）、禁物のリキニールをちょびり祖父に飲ませるのだ。かわいそうに祖母は部屋にはいってきて、その夫に、コニヤックをたしなまないようにと懇願する。祖父はにがりきるが、思いきってぐつと飲みほす。祖母は悲しそうに、がっかりして、だがしかし頬笑みながら、ふたたび出ていってしまふ、というのは、祖母はほんとうにつつましくやさしかったので、わが身やわが身の苦痛を軽んじる気持と、他人への愛情を生かそうとする気持とが、うまくそのひとみのうちで溶け合せて、思わず頬笑みとなるのであって、多くのひとの顔に見られるのは反対に、その頬笑みのなかには、当の祖母にだけは皮肉が、他のひとたちのすべてには眼のくちづけとでもいったもの、可愛がっているひとたちをばげしく眼で愛撫せずには眺められないといったふうな眼のくちづけが、こめられているのだった。祖母への大叔母の意地悪も、祖母の空頼みの光景も、初めからあきらめながら祖父から杯を取り上げようとむなしくつとめるその弱々しい気の毒な姿も、やがては慣れつこになるもので、はては笑いながら平気で眺め、それでもたらずにこんどは積極的に面白がつて、いじめる側についてしまひ、

自分ではいじめているのではないときさえ思いこむようになるものなのである。だが、こういうことは、当時の私には見るにしのびないやなこと、大叔母をぶちのめしてやりたいとまで思った。しかし、「パチルド！ とめにいらっしやい、旦那さまがコニヤックを召し上がりますよ！」を耳にすると、卑怯の点ではもうひとかどの大人であった私は、われわれのすべてがひとたび大人になったが最後、眼前に悲痛なもの、没義道なものを見せつけられるときによくやるあの手を使った、つまり見て見ぬふりをしようとしたのであって、私は家のずつと上の、勉強部屋の隣の屋根裏の小さな部屋に上がつて、涙にむせんだが、そこは菖蒲の匂いがし、また壁石のあいだからのび出した一本の野生の黒ずぐりが、半開きの窓から花をつけた枝をさしこんで、部屋を香らせていた。ある特殊な、卑俗な使用にあてられたこの部屋は、しかし昼のあいだは、ルーサンヴィル・ル・パンの小塔までも見晴らしがきき、長いあいだ私の隠れ家となっていた、それというのも、そこは、読書とか夢想とかすすり泣きとか快楽とか、いわばひとから乱されぬ孤独を要求する私のかまけごとのたびに、いつも鍵をかけて閉じこもるただ一つの部屋だったからである。ああ！ それにしても私は知らずにいたのだ、午後や夕方あの休みなしの散歩のあいだ、祖母の心を悲しく占めていたのは、彼女の夫の些細な不摂生より

* 便所を暗に指しているものと思われる。

ももつと大きいもの、すなわち私の意志の欠如、虚弱な体質、ひいてはそれらが私の将来に投げかける不安であったということを。そうした散歩の途中、私たちのまえをくり返し通りすぎる祖母をよく見ていると、空に向かつてその品のある顔をななめに上げることがあった。その皺の目立つ蒼色の頬は、よる年波に、はや秋の畑のようなモーヴ色に見えるのであって、外出するときは、そんな頬を少し高めの小さいヴェールで隠しているのだが、寒さのせいか、それとも何か悲しい思いにさそわれたのか、ゆくりなくもほれ落ちた涙のひとしずくが、いつもその頬の上にかわこうとしていた。

寝に上がっていくときのたった一つのなぐさめは、お母さんが寝台にいる私に接吻をしにきてくれることであつた。だが、このおやすみはほんのわずかな時間にすぎず、母はすぐ下りていってしまうので、母の上がってくる足音を耳にし、二重扉の廊下に、編んだ麦藁（わら）の小さい飾り紐の下がっている青いモスリンの庭着の軽い衣ずれの音が聞こえてくる瞬間は、私にとつてじつに息苦しい瞬間だつた。それはやがてそれにつづく時間、母が私から離れてふたたび下りていってしまう時間を告げているからだ。それで、母がやってくるまでの休息の時間を長引かそうとして、その恋しいおやすみができるだけおそくなるようにと願うようになった。ときど

* モーヴ色はうすい赤紫だが、ここでは蒼色が薄紫色をおびているのをいう。

き、接吻してからドアを開けて出てゆこうとする母を呼びかえして、「もう一度接吻して」と言いたいときがあつたが、すぐにいやな顔をされることはわかっていた、というのは、私の悲しみや興奮を見るに見かねてうちづげをしに上がつていって、あの和睦の接吻をするなどということとは、そんな慣例を愚劣だと思つている父の機嫌に触れたからであり、母にしても、そんな欲求や習慣を、なるべくならなくさせたいと心と思つていたに違ひなく、すでに戸口まで行つているときに、もう一度接吻をせがまれるような習慣を許しておくはずはないと思われたからだ。それにまた、一瞬まに、母がやさしい顔を私の寝台のほうにかしげ、その顔をミサ聖祭中の和睦の接吻伝達のための聖体のように私にさし出し、私の唇がその聖体に宿る母の現存と安眠の力をを汲みとろうとしたときに、母のもたらしたそんな安堵も、それにつづく母のいやな顔を思い浮かべると、すっかり台なしになつてしまふのだ。しかし、結局お母さんがほんのわずかしか部屋にしてくれないそうした晩も、夕食にお客があつて、おやすみを言いに上がつてきてくれない晩にくらべると、まだしも楽しかった。お客さんというのはいつもスワン氏に限られていて、通りすがりによってゆくどこかの知らないひとたちを別にすると、これがコン

* 和睦（親睦）の接吻はキリスト教用語。
** 聖体現存はキリスト教用語。母をキリストにたとえていう。

プレの家にくるほとんど唯一のひとで、時には隣人として夕食の席へ（といつても例のいかがわしい結婚をしてからは、私の家ではその細君を招きたがらなかつたので、ずつとまれにはなつたけれど）、また時には夕食後に不意にやつてきた。夕方、家のまえのマロニエの下で、みんなで鉄のテーブルをかこんでいると、庭のはずれで呼びりんの音がする。それは、とめどのない、冷やかな、いかにも鉄らしい音をまき散らしてやかまししいので、家のものがみんなはずして「鳴らさずい」はいることにしているあの大げさなかん高い鈴ではなくて、二つずつ鳴る来客用の小さい呼びりんの、おとおどした、楕円形を描く、金色のひびきなので、みんなはずぐに、「お客さんだ、いったい誰だろう？」とたずね合うのだが、それがスワン氏でしかないことはよくわかっているのだ。大叔母は、模範を示すために、つとめてわざとらしくならない口調で、声高に話しながら、来客に対してこれと話すものではありません、来客に対してこれほど不愛想なこととはなく、客は聞いてはならない話の最中だと思ひこんでしまうものです、という。それから、祖母が斥候（しやくこう）に出されるのだが、祖母はもう一度庭をまわる口実のできたことをいつも喜んで、それをいいしおに、薔薇の花を少しでも自然のままにかえしうと、通りすがりに、その植え込みの副木を抜いてやる、あたかも床屋のなでつけすぎたわが子の髪に手を入れて、ふつくらとさせてやる母親のように。

私たち一同は、祖母がもたらす敵情を、優劣な寄手に囲まれてしりごみするときのように、いまかいまかと待っている、やがて祖父がいう、「あ、スワンの声だ。」が「実際声ではかはつきり見わけがつかなかった。蚊をよせつけないために庭はできるだけ明けを暗くしているので、赤毛に近いブロードの髪をブレサン好みに刈り上げた広い額、その下についてた鉤鼻と緑色の眼、そのういつた顔立のほうはわかりにくかった。私はシロップをもつてくることを言いつけに、何気ない様子で席を立つ。祖母はいつも、そんなふうにさりげなくするのが好ましいという意見なので、お客のあるときだけ特別に振舞うといった様子が見えないことが大切なのだと考えていた。スワン氏は私の祖父よりもずっと若かったが、ふたりの仲はたいそうよかった。祖父はかつてスワン氏の父親の親友だったのだ。この父親なるひとは、すぐれた人物だったがちょっと変わっていて、ときどき何でもないことに心の飛躍をさまたげられ、思考の流れが変わるひとだったらしい。年に何度となく、食卓で、祖父の口から、この父親のスワンが夜となく昼となく看病した夫人に死別した時の態度について、相も変わらぬ逸話を聞かされた。その時祖父は久しくその親友に会っていないが、とりあえずおくやみに、その親友のいる、コンブレ

* 十九世紀中頃の俳優で、いわゆるブロードス刈りをはやらせた。前を短か目に刈って立て、両わきを長目にうしろになでつけ、全体を角刈りの形にした髪型。

近在のスワン家の所有地に駆けつけ、納棺に立ち会わさないように、涙にかきくれている彼をへつれ出した。ふたりは薄陽のさしている庭を歩き出した。すると、出しぬけにスワン氏の父親は、私の祖父の腕をとって叫んだ、「やあ！ ころういいい天氣に一緒に散歩するなんてじつに愉快ですね。美しいと思いませんか？ どれもこれも、どうです、この木々、あのさんざし、それからまだおほめにあずからぬこの池。どうもあなたはいやにふさぎこんでいますね。どうですか、このそよ風は？ ああ、なんととっても、やはり生きていなきやだめですよ、ねえ、アメデさん！」そのときにわかに、死んだ妻の思い出が彼によみがえった、そして、時もあるうにいったいどうしてこんなときにうっかり陽気になってしまったのか、われながらわからなくなつたが、結局、むずかしい問題が頭に浮かんだときの癖になつている動作、片手を額にやり、眼と鼻眼鏡の玉とを拭く動作をやつて、お茶をにこした。それにしても、妻を失つたについては、どうにもなぐさめがつかなかった。だが、その後生きながらえた二年のあいだというもの、よく私の祖父にいうのだった、「おかしいもんですね、死んだ家内のことをよく何度も考えるんだが、どうも一度にたくさんは考えられないんですよ。」それ以来、「一度に少しずつ何度か、スワンの親父さん式に」というのが祖父のおはこの一つになって、まるつきり違つたこ

とも使うようになった。そういうスワンの父親は、私には怪物だと思われたかもしれないのだ、もしも祖父がくり返してころもらしていなかったとしたら、「え、何だつて？ あれは感心な心がけのひとだったよ。」私は祖父を最上の裁判官だと考えていたし、その判決は私にとって法規ともなつたので、その判決はそれから後、私の気持が処罰に傾きがちなる人の過失を無罪にすることにたびたび役立ったのであった。すいぶん長い年月のあいだ、といつても、それはとくにその結婚以前の話なのだが、息子のスワン氏は、たびたびコンブレへやつてきて私の大叔母や祖父母を訪ねたものだ。そのあいだ、大叔母や祖父母は、スワンが以前に彼自身の家庭のひとたちの出入りしていた社会とは全然縁のない派手な生活を送っていることには気づかなかつたし、またこのスワンという名は、彼が私の家を使っているいわば変名みたいなもので——たとえ、それとも知らずに有名な盗賊を泊めている律儀な宿屋の一家といった無邪気な正直さで——じつはジョッキークラブのもつとも粹な会員のひとり、パリ伯爵やイギリス皇太子のお気に入りの友人、フオーブール・サン・ジェルマンの上流社交界きつての寵児を泊

* フオーブール・サン・ジェルマンはパリのセーヌ左岸にあつてフランスの貴族が多く住んだ特殊な区域の名称。ジョッキークラブは一八三三年に作られたフランスの特権階級の紳士のもつとも粹な社交クラブで、乗馬、競馬の流行を支配した。パリ伯爵はルイ・フィリップ王の孫。イギリス皇太子は後のエドワード七世。

めていたのだとは、家人の誰ひとりとして気がつかなかったのである。

スワンの送っているそんな派手な社交生活を私たちが知らなかったのは、幾分は彼の性格の控え目やつつしみ深さによることはもちろんであるが、また一つには当時のブルジョワたちが社会について多少インド的な考え方をしていたことにもよるのである。すなわち、社会というものは遮断されたそれぞれの階級から構成されているものであって、各人は生まれ落ちるとから両親の占めている階級に属し、例外的な経歴とか思いがけない結婚などという條件にめぐりあわなにかぎり、その族籍を離れて上の階級にははいれないものと考えられていた。父親のスワン氏は株式仲買人だった。だから「息子のスワン」は、納税者一覽表さながらに、所得に応じて財産がいろいろと変動するといった階級に生涯属しているのである。世間では、彼の父親がどんなところに出入りしていたかを知っていたか、息子がどんなところに出入りしているか、どんなひとたちと交際する「身分」であるかをも知っていた。これ以外のひとごとと知り合いがあるのは、当然、若いひとたちとの交際であるわけで、彼の家の古くからのつきあい、たとえば、私の家の古くからのつきあいは、たとえ、私の家のものなどが、そうした交際に対して好意的に見えぬふりをしていたのは、親を失ってからも古いつきあいを忘れてすにまめまめしく訪ねてくれるその情誼に対してであった。しかし、私たちの知らないところで

彼の会っているそうした別の知り合いは、もしも私たちと一緒にのときに彼がそのひとたちに出会ったら、はずかしくて彼から挨拶のできないようなひとたちだったに違いない。彼の両親と同等の地位にある株式仲買人の息子たちと並べて、スワンに社会的係数といったものをつけてみれば、その係数は他よりは幾分劣るものになつたらう、なぜなら、ごく気さくな物腰の彼、そしてずっと以前から骨董品や絵画に「のぼせて」いた彼は、いまでは、ある古めかしい邸宅にみこしをすえて、そこに彼のコレクションを積み重ねておいた暮らしをしていたからである。私の祖母はその邸へ一度行ってみたいと思っていたが、あいにくそれはオルレアン河岸・大叔母がそんなところに住むのは恥だと思つている街にあつた。「少しはお眼がおききになりました？　これはあなたのためにお聞きするのですよ、だつてかならずいともつかまされていらつしやるにきまつてゐるんですもの、商人に」と大叔母は彼にいうのだった。大叔母はもちろんスワンの眼はきかないと思つて、話し、話のときにまじめな話題を避けるような男、料理の仕方を微細に話すようなときばかりではなく祖母の妹たちが美術のことを話すときでも、いたつて平板な知識の正確さを見せるだ

* バリの中心、サン・ルイ島のセーナ河畔にある通りの名。パリのものとも古い美しさを残した区域だが、大叔母は第三帝政期に作られた新しい建物のある区域に住むのが立派な生活だと思つている。

けの男に対しては、知的見地からいっても、けつして高くない買わなかつた。ある絵について意見をうかがいたいとか、感心の程度をもらしていただきたいとか祖母たちにながされても、彼はほとんど無愛想に近い沈黙をまもっていた。そのかわり、できればその絵のある美術館とか、描かれた年代などといった物的な知識を披露して埋め合わせるのだった。しかしふだんの彼は、誰か私たちの知っている人間、たとえばコレブレの薬剤師とか私たちの家の料理女とか私たちの馭者とかを選んできて、そうした人間と自分とのあいだの新しいいきさつをいつも話しながら、私たちを面白がらせようとするそんなことで満足していた。なるほど、そうした話は大叔母の顔を解きはしたが、それはスワンがいつもの話のなかで滑稽な役割を演じているためなのか、それとも話すときの彼の機知のためなのか、さつぱり大叔母には見当がつかなかつた。

「スワンさん、あなたはほんとうにお人柄ね！」大叔母は家じゅうでただひとりの少々俗っぽい人間だったから、話題がスワンのことになると、よそのひとにわざわざこんなおせっかいはいいた、——スワン氏はその気さえあれば、オスマン大通りにでもオペラ通りにでも住めただらうとか、四、五百万は遺したはずのスワン氏の息子だが、あれは物好きであんなふうになっているんだとかいふことを。それにこの物好きという

* とともにナポレオン三世の第二帝政期に近代的規模をもち、新興ブルジョワが好んで住んだ大通り。

ことを他のひとに聞かせればきつと座眼になるだろうと思つていた大叔母は、たとえ、元日にスワン氏が大叔母のためにマロン・グラセの包みをもつてパリの私たちの家にくるようなき、その場に客が居合わせでもすると、スワンに向かつてこういうのを忘れなかつた。「ええと！ スワンさん、あなたはずつとあの酒の専売所のそばに住んでいらつしやるのでしたね、リヨン線にお乗りになるときに、すぐ汽車の間に合うように？」そういつてから、鼻眼鏡越しにちらりと他の客のほうを見るのであつた。

しかし、誰かが私の大叔母に向かつて、このスワンは、息子のスワンとしての表向きはあらゆる「立派なブルジョワ社会」やパリのもつとも信用ある公証人や代言人に迎えられるだけの十分な「資格をもち」ながら（じつは彼はこんな特權など娘に相続させたつてかまわないといふ投げやりな氣持だつたらしい）、かげではこつそり人目を避けて、まったく別な生活を送つてゐる、と告げたり、また、このスワンは、帰つて寝ることになりましたよといつて、パリの私たちの家を出ながら、通りを曲がるとすぐ引き返し、仲買人とか仲買人仲間などの眼にはけつて触れることもないようなサロンにはいつて行くのだ、などと話したりしたら、それはこの叔母

* 保税倉庫にある酒類の公設市場、アル・オー・ヴァン
のこと、次のリヨン線（パリ・リヨン・メデイテラ
線）とともにスワンの住むオルレアン河岸から遠くはな
い。

* 大叔母と同じ。以下下ごとき混用。

にとつて、異様なことに思われたであろう。たとえ、誰かもつと物知りの婦人にとつて、その婦人自身がアリストアイオスと個人的に親しくなつたなどと考えること、しかも、そのアリストアイオスが、婦人とじかに會つて話を交わしたあと、テティスの住む水の王国、人間界の者には見ることでできない国、ウエルギリウスの描くところではそこでアリストアイオスは大いに歓迎されたというそんな国へ、ざんぶりと沈んで行つた、などと考えることが、ひどく異様に思えるのと同様なのである。また、もつと大叔母の頭に浮かびそうな比喩にとどめるならば（といふのは、コンブレでクッキーを盛る私たちの菓子皿にそんな絵がかいてあるのを大叔母は見ていたのだから）、あのアリ・ババ——やがて自分がひとりきりになると、誰にも氣づかれないう宝物で眼もくらむばかりの洞窟にはいりこむであらうあのアリ・ババ——と会食しなければならなかつたと考える、そんなときの氣持と同じなのであつた。

ある日、夜会服のままなのをことわりながら、スワンがパリの私たちを訪ねてきたことがあつたが、やがて帰つたあとで、フランソワーズは駁者から聞いたといつて、スワンが「ある大夫人のところへ」晩餐をしてきたのだというところへ——「そうよ、女人筋の大公夫人のところへね！」と、叔母は肩をそびやかしながら、編物から眼もあげずに、澄まし顔の皮肉で答えた。

* ウエルギリウスの『ケオルギカ』四・二による比喩。

だから大叔母は彼にはざつとばらんふるまつた。大叔母は私たちの招待がスワンに喜ばれてゐるものと信じていたので、夏、彼がくるときに、きまつて彼の庭の桃やえぞ苺の籠をさげてくることも、イタリアに旅行するたびに、私に古代の名作の写真をもつてくることも、ごくあたりまえだと思つてゐた。

初めて家にくる初顔合せのお客の相手にまわすには少しお粗末だといふので、スワンを招んでいないような大宴会のときでも、ごちそうにつかうソース・グリビッシュやパイナップル・サラダの作り方がわからないと、遠慮会釈もなく、彼を迎えにやつた。また、話がたまたま、フランス王室の高貴なひとたちにおよぶと、「私たちにはけつてお近づきになれないかたがたですわ、あなたにも私にも、だからそんなお話はよしましょう、ね」と大叔母はスワンにいうのだが、そのスワンときたら、なかなかどうしてそのポケットのなかに、トイックナム*からの手紙の一つも入れかねない人間だつた。また、祖母の妹が歌をうたう宵には、大叔母は彼にピアノを叩かせたり、譜めくりをさせたが、よそではあんなにもはややされてゐるこの人物を扱うのに、安物をいじるほどの注意もせずにコレク

* ゆで卵の黄味ソースにゆで卵の白身、コルニション、
パセリのみじん切りをまぜたもの。

* イギリスのミッドルセクスにある別荘地で、イギリス
皇太子、後のエドワード七世が滞在し、またフランス王
家の亡命地でもあつた。